

覚一本平家物語におけるサ行イ音便について

著者	奥村 和子
引用	言語文化学研究. 日本語日本文学編. 2007, 2, p.(1)-(10)
URL	http://doi.org/10.24729/00002613

覚一本平家物語におけるサ行イ音便について

奥村和子

はじめに

サ行五（四）段活用動詞は、現代の共通語において連用形が音便を起こさない唯一の五段動詞である。その特徴故に、その文献資料や方言での音便状況、衰退の理由を中心に多くの論考がなされてきた。これまでにまとめられたサ行イ音便形についての分析では、（もちろん対象文献・方言や観点により差異はあるものの）「敬語動詞」「語幹末母音 e の動詞」「語幹末長音の動詞」「2拍1類動詞」「少拍語」「使役性動詞」「他動性」といったものが音便を起こしにくい要因として挙げられている⁽¹⁾。また、近松浄瑠璃においてはサ行イ音便がある種の表現意図を持って用いられているとされており、動詞そのものの他、使われる場面からの考察も必要と思われる。『覚一本平家物語』については、会話文における音便形と非音便形との文体差（性、身分、階層による使い分け）が指摘されているが、サ行イ音便については問題点が多いとして分析されていないため、本稿ではその考察を行うとともに、変化の様相を見るため、『平家正節』との比較を行う。

1. 調査方法及び調査結果

『平家物語総索引』をもとに、日本古典文学大系本『平家物語』（底本・覚一本系統龍谷大学本、以下「覚一本」と称する）で「て・たり」に続くサ行四段動詞をすべて抜き出してその音便の有無をチェックし、更に『尾崎家本平家正節』（以下、「正節」と称する）でその対応箇所での音便の有無を見た。ただし、大系本の振り仮名、及び龍谷大学本以外を底本としている箇所についてはこれを覚一本の調査対象から省き、正節での対応箇所を見るためのみに使用した。

覚一本、正節におけるサ行イ音便率は、地の文における音便率、会話文における音便率、合計音便率の順に次のようになる。数値は（音便を起こした用例数／音便形と非音便形の合計用例数）により算出したものである。

	地の文	会話文	合計
覚一本	30%(125/422)	24%(24/99)	29%(149/521)
平家正節	41%(099/244)	32%(23/72)	39%(122/316)

いずれも正節で割合がやや高くなる。サ行イ音便については、中世後期に盛んになった後、江戸期に入って衰退したとされ、安永年間に成立したとされる正節においても全体の割合は増加しているが、イ音便を起こしているサ行動詞の異なり語数を見ると 25 から 24 とむしろ減少している（共通して音便を起こす動詞は 19、覚一本のみ音便を起こすのは「おはす」「こす」「すます」「なす」「ふす」「もてなす」の 6、正節のみ音便を起こすのは「いからかす」「おろす」「かざす」「ちらす」「なおす」の 5）。割合が高くなるのは、もともと音便を起こしていた各動詞の音便率が増加したという面が大きい。

語別の音便率の表を文末に掲げておく。

2. 考 察

2-1. サ行イ音便の使用場面

覚一本の会話文におけるサ行イ音便の例は延べ 24 例（異なり語数 11）あるが、その発話者は文覚（4 例）、義仲（3 例）、宗盛（3 例）、義経（2 例）、重盛、清盛、今井四郎、佐々木四郎、足利忠綱他、武士（もしくは元武士）がほとんどであって、皇族や女性が用いた例は見られない。

状況としては怒りや忠告の場面といったものが目立つ。

[怒り]

「もとよりをのれらがやうなる下臈のはて（略）天下の大事引出いて、剩此一門亡ぼすべき謀反にくみしてんげるやつ也」（巻二・西光被斬、清盛→西光）

「せむずるところ、糺問してよくよく事の子細をたづねとひ、其後河原にひきい^いだいて、かうべをはね候へ」（巻四・信連、宗盛→信連）

「などか太政入道やき^いだいてうたざるべき」（巻四・永僉議、三井寺大衆）等

[忠告]

「宇治の悪左府の死骸をほり^いおこいて実験せられし事などは、あまりなる御政とこそ覚え候しか」（巻二・小教訓、重盛→清盛）

「争か御合戦候べき。甲をぬぎ弓を^いはづめて、降人にまいらせ給へ」（巻八・鼓判官、今井四郎→義仲）

『甲をぬぎ、弓を^いはづいて降人に是へまいれ』とは仰候べし」

（巻八・法住寺合戦、時忠・知盛→宗盛）等

また、文覚という人物はその会話文中のサ行四段動詞ほとんどに音便（発言中、サ行イ音便形 4 例、非音便形 1 例）が見られるのだが、このうち非音便形 1 例も、

音便形と同じ場面、同じ聞き手に対して使われている。

「はやはや謀反おこして、日本国したがへ給へ」 (巻五・福原院宣、文覚→頼朝)

「やがてのぼって申ゆるいてたてまつらん」 (巻五・福原院宣、文覚→頼朝)

この2つの発言の間には頼朝の父義朝の思い出を語ることにより「其後はうちとけて物がたりし給ふ」旨の記述がなされており、より親しく、うちとけた場面で音便形が用いられていることになる。

更に前稿でも少し触れたが、一般に音便を起こさない動詞とされる「おはす」の音便形が覚一本には見られる。

「猫殿のまれまれおはるたるに、物よそへ」 (巻八・猫間、義仲→猫間中納言)

「いかが、けどきにおはるたるに、さてはあるべき」

(巻八・猫間、義仲→猫間中納言)

義仲も比較的音便を多く用いる人物であるが、同じ「おはす」+「たり」を非音便形で用いている箇所がある。

「但十郎藏人殿こそ御辺をうらむる事ありとて、義仲が許へおはしたるを、義仲さへすげなうもてなし申さん事、いかんぞや候へば」

(巻七・清水冠者、義仲(実際の発言は使者の今井四郎)→頼朝)

頼朝に逆らう意思の無いことを伝える場面である。音便を用いている「猫間」が義仲の「たちみの振舞の無骨さ、物いふ詞つづきのかたくななることかぎりない様子を紹介する場面として描かれていることとあわせると、音便形と非音便形とで場面による使い分けが考えられるわけである。

会話文においては、この他の用例もほぼ、怒り、命令、文句、忠告、なだめる、うちとけた場面等といった、相手に対する敬意をやや失する場面に用いられているという共通点が見られる。

例外は義経が天皇に戦況を報告する場面及び、斉藤兄弟が六代の母に六代の様子を報告する場面くらいであり、前者については語の用いられ方(複合動詞としての意味)が影響しているように思われる。すなわち、この義経の例を含め、同じ「落とす」という動詞が、敵や土地を「攻め落とす」場合には音便を起こしやすく、単に物を落とすという場合には音便を起こさないという傾向が見られるのである。

[音便を起こしている「落とす」]

「義経は宇治の手をせめおといて、まづ此御所守護のためにはせ参じて候」

(巻九・河原合戦、義経→法皇)

「九郎義経こそ三草の手を責おとひて、すでにみだれ入候なれ」

(巻九・老馬、宗盛(実際の発言は使者)→平家公達)

[音便を起こしていない「落とす」]

「おちの為朝が弓の様ならば、わざともおとしてとらすべし」

(巻十一・弓流、義経→まわりの武士)

「況や是はうみおとして後、ひとひかたときも身をはなたず」

(巻十二・六代、六代の母の嘆き)

前述した怒りの場面での「(河原に)引き出して(頸をはねよ)」「やきいदैて」、忠告の場面での「弓をはづいて」等も、戦いに関わる場面で用いられる用法に音便が多く見られると言えそうである。

一方、正節で新たにイ音便を起こしている例は以下のようなものである。

「重盛不思議の事を聞出してめしつるなり」(巻二・烽火之沙汰)→「出ひて」

(482d・口説)重盛→武士、いざという時に集まらないということがないよう諫める

「この聖御房は、なまじみによしなき事申いだして、頼朝又いかなるうき目にかあはんずらん」(巻五・福原院宣)→「出ひて」(1198d・口説)頼朝独白、平家討伐の院宣を貰おうと言う文覚に対しあきれる

「小督があらんかぎりは世中よかるまじ。めしいだしてうしなはん」(巻六・小督)→「出ひて」(241b・口説)清盛独白、小督に娘婿をとられたため小督を亡き者にしようとする

「まづ鼓判官知康が不思議の事申いだして」(巻八・法住寺合戦)→「出ひて」

(995c・口説)頼朝(の使者)→都、鼓判官はとんでもないことをしたので召し使わないよう進言

「其中にことに手をおろしてうちまいらせ候ひしは、あふみの国の住人木村の三郎成綱」(巻九・小宰相身投)→「おろひて」(1051a・口説)滝口時員→通盛北の方、通盛の死を報告し生きてくれとの伝言を伝える

「桜の花をかざして青海波をまうて出られたりしかば」(巻十・熊野参詣)→「挿ひて」(279d・下ゲ)僧→同行の僧、維盛の華やかな頃と現在を比較し哀れむ

「ただわれにおもひゆるして、内侍所を宮こへかへしいれたてまつれ」(巻十・請文) → 「ゆるひて」(1163c・白声) 二位殿→宗盛、宗盛に息子の助命を嘆願
 「おちの為朝が弓の様ならば、わざともおとしてとらすべし」(巻十一・弓流)
 → 「落ひて」(541b・折声) 義経→まわりの武士、戦場で弓を拾ったことを咎められその理由を説明

「是をめし出され、刀の実否について咎の左右あるべきか」(巻一・殿上闊討) → 「出ひて」(94d・口説) 忠盛→上皇、殿上人が忠盛を上皇に訴えたことに対する釈明

使用者に女性が現れる。また状況としては、覚一本にひきつづき怒りの場面もないではないが、何らかの事情説明、不満を持たれた時の釈明といった、説得の場面が目立つようになる。語としては「出す」「落とす」「起こす」「ゆるす」等、覚一本で既に音便を起こしている動詞であることが多く、また覚一本でイ音便を起こしていた箇所の前後の文脈に現れることが多い。

会話文におけるサ行イ音便の用いられ方の特徴については、近松浄瑠璃のそれについて次のように指摘されている。⁽⁴⁾「近松の浄瑠璃にはイ音便がまだ表れるが、それは当時一般市民のことばというより、かなり年配の者、あるいは階級的には下位に属する人たちのことばとして表れることが多いように見うけられる。そしてそれも遠慮のいらぬ間柄において用いられることが多かったようである。よそ行きのことばではなく、インフォーマルなことばとして使われることがあったのである」「同じ世話浄瑠璃でも近松より十歳年下の紀海音の作品になると(略)殆どが非音便形をとっている。近松はイ音便を交えて、登場人物をよりそれらしく描き、文章にひだと奥行きを与えることに努めたが、当時一般のことばとしては(サ行)イ音便は極めて弱いものとなっていたものと思われる」。そしてその用例には、借銭の返済を迫る場面や、金での解決を嘆願する場面などが挙げられる。『平家物語』も似た傾向が見られることになるわけで、その音便の文体的価値を近松が効果的に用いたものであろう。

2-2. 音便を起こしにくい動詞

先行論文で挙げられた「サ行イ音便を起こしにくい動詞の条件」としては、「はじめに」で挙げた如く様々な面からの指摘がある。ただし、それらの動詞が「古くは起こしていたものが何らかの原因で起こさなくなったもの」であった場合、『平家物語』においてもこれらがあてはまるとは限らない。今回はその検討が及

ばないことと、用例が傾向を見るほどに見出せないものも多いことからいくつかの結果の報告にとどめる。

2-2-1. アクセント

覚一本で2拍動詞について見ると次の通りである。

音便を起こす動詞

1類「こす」

2類「さす」「だす」「ふす」「なす」

音便を起こさない動詞

1類「おす」

2類「めす」「むす」

2拍1類動詞が音便を起こしにくいと言われるわけだが、覚一本ではやや2類動詞に音便を起こす語が多く見られるものの、1類動詞にも見られないわけではない。橋本氏論文の指摘するように1類動詞の音便消失が中世期における京都アクセントの変化の為であるとするならば、覚一本の時点ではまだこの影響が及んでいなかったとも考えられる。一方、覚一本から正節にかけて音便形の無くなった動詞は「もてなす、こす、ふす、なす、おはす」の5語であって、その結果音便を起こす2拍動詞は2類のみになる。ただし、2類動詞もかなり減少しており、会話文では2拍動詞の音便形が消えること後述の如くである。

なお、2拍1類動詞が音便を起こしにくいという条件については各資料についても例外が多く、この条件を否定する論も見られる。また、奥村三雄氏論文ではその条件を挙げながらも「(橋本四郎氏の) 解釈《アクセント一類語は、名義抄～補忘記の間に、アクセント変化が起った為…》は、やや疑問である。中古期高くついていた助詞『テ』が、次第に低くつく様になるという傾向は、一類語のみならず、二類語にも認められる」とする。しかしながら同氏『平曲譜本の研究⁽⁵⁾』によれば、「平曲資料において、助詞『テ』は大てい活用語の連用形Eに付き、従属式●型を原則とする。二拍二類動詞など上昇調に付く時は、例外として(略)低起式○型も相当認められる」という表現であって、用例としては2拍2類語にテが高く付く例も挙げられている。すなわち、柳田氏が述べられた通り「古代と中世との間に起きた、助詞『テ』が低くつくようになるという変化は、第二類の場合にはすべての語に起きたのではない点、更に、『テ』が低くつくようになるということは同一でも、動詞のアクセントの型が違えば、音便を起こす音節への影響は違っ

たかも知れないという点に問題を残す」わけである。後述の如く、拍数の観点からは2拍動詞全体が音便を起しづらくなっているのもあって、その中で「テがすべて低く付く1類」が「テを低く付けたり高く付けたりする2類」に比べてより音便を起さないのであるから、やはりまったく無関係であるとも思われぬ。

なお、正節における「2拍2類動詞+て」について、助詞「て」の高低に注目してそのアクセント表記を見ると、次の如くである。

[テが従属式●型と思われるもの]

指イて(折張×、805b・中ユリ) 指て(折張×、314c・中音) なして(抑張×、700c・折声) なして(折張×、464a・中音) なして(抑[小廻]強、1030a・拾) さして(抑[小廻]張、1243d・上音) 召して(××上、40b・素) 召て(抑張×、799a・下ゲ) 指て(抑[小廻]強、201c・初重)

[テが低接式○型と思われるもの]

指て(×コ×、1002b・口説) 刺ひて(沈[二漂居][大廻下]、1046b・拾)

全体的に解釈の難しい譜記が多く、高低の判定も確実とは言えないが、全体として従属式●型と思われるものが多く見られるようである。しかしながら、活用語尾の無い例も多く、この結果をもってして音便形との関係を云々することはできない。⁽⁶⁾

2-2-2. 拍数

拍数ごとにサ行イ音便率を「各拍数の音便形数/各拍数の音便形数と非音便形の合計数」として算出すると以下の通りである。

覚一本 2拍 19%(29/150) 3拍 38%(108/286) 4拍 18%(11/60) 5拍 4%(01/25)

正節 2拍 9%(06/69) 3拍 54%(107/198) 4拍 18%(07/38) 5拍 25%(03/12)

2拍語は、カ行イ音便との同音衝突等の理由で音便を起しにくいと言われるが、覚一本においては4拍以上の動詞に比べて少なくはない。しかし正節になるとかなりその割合が減少する。また、両本とも3拍動詞が比較的音便を起しやすいいことは言えそうであって、正節ではその傾向がより顕著になり、とりわけ会話文におけるサ行イ音便は3拍動詞のみに限られることになる。

2-2-3. 敬語動詞

覚一本で「あそばす」「おはす」、正節で「あそばす」に音便形が見られる。覚一本における「おはす」の音便例は例外的なものであろうが、「あそばす」の音便

率は覚一本で88%、正節で100%と相当に高い。これに対して、音便が用いられない敬語動詞としては、「いたす」「おはします」「おぼしめす」「おぼす」「きこしめす」「まうす」「めす」等がある。音便があまり敬意の現れない部分でよく用いられ、女性が用いることがほとんどない、という性格がある以上、敬語に現れにくいことは容易に納得されるが、必ずしも敬語だからといって忌避されていたとは思われないこと、先行論文に説かれる通りであろう。

なお、「あそばす」の音便例はすべて地の文の用例であって、会話文に見られたような場面による特徴は特に見受けられない。音便形も非音便形もほぼ用いられ方に差は無いように思われる。むしろ次に挙げる非音便形の方がくだけた場で用いられているようですらある。正節ではこの唯一の「あそばす」非音便形が音便を起こすことになる。

此若君あまりに夜なきをし給ひければ、院きこしめされて、一首の御詠をあそばしてくださされけり。(巻六・祇園女御) →遊ひて (125b・指声)、白河院が忠盛に清盛(白河院の子とされる)のための歌を詠む

2-2-4. 語幹末母音

語幹末母音別に「各語幹末母音における音便数/各語幹末母音における音便形と非音便形の合計数」として音便率を算出すると次の如くなる。

覚一本 a35%(108/312) u41%(22/54) e 5%(05/94) o23%(14/61)

平家正節 a42%(086/204) u50%(17/34) e14%(06/44) o40%(14/35)

音便を起こしにくいとされる語幹末 e の動詞の音便率は確かに他の母音に比べて低いが、皆無なわけではない。覚一本、平家正節ともに「ためす」「かへす」はイ音便を起こす。もともと異なり語数として、語幹末母音 e を持つサ行四段動詞自体が少ない(a動詞 36語、u動詞 12語、e動詞 6語、o動詞 13語)わけだが、そのうち「めす」という音便を起こさない動詞が頻出(覚一本で 69回、正節で 30回)することが音便率の低さになって現れている。「めす」はここまで挙げられた「少拍」「敬語」と言った音便を起こしにくいとされる要素を複数持つ動詞であって、少なくともこの文献において語幹末母音のみにその所以を求めることは難しかろうと思われる。

まとめ

会話文におけるサ行イ音便は数が少ないながら、発話者(主として武士)や、

用いられる場面（怒り、忠告等）に特徴が見られる。サ行を除く音便形については夙に会話文における傾向が指摘されているわけだが、他の各行四段動詞の音便が規則的な文法現象となっていくのに対して、サ行四段動詞はその音便の衰退故に、動詞の制限の他、音便形の用いられる場面性を近松の時代に至るまである程度保っていたことになる（上方文献においては、ハ行促音便もこれに準じよう）。

先行論文に示されたサ行イ音便を起こさない動詞の条件については、ある程度似た傾向を示したが、いずれも厳密なものではない。このうち、アクセントについては平曲資料の活用できるところであり、助詞「て」の高低と音便との関係については各行にわたって詳細に見るべきであろう。

表 動詞別音便率 数値は、音便率（音便形数／音便形と非音便形の合計数）

	音 便 率			音 便 率	
	覚一本	正節本		覚一本	正節本
しるす	100%(08/08)	100%(04/04)	うつぶす	0%(00/04)	0%(00/01)
はづす	100%(07/07)	100%(07/07)	おくす	0%(00/01)	0%(00/01)
ともす	100%(03/03)	100%(03/03)	おどろかす	0%(00/01)	0%(00/01)
ためす	100%(01/01)	100%(01/01)	おはします	0%(00/04)	0%(00/02)
むらめかす	100%(01/01)	100%(01/01)	おぼしめす	0%(00/08)	0%(00/02)
わかす	100%(01/01)	100%(01/01)	おぼす	0%(00/07)	0%(00/01)
こす	100%(02/02)	—	かくす	0%(00/02)	0%(00/01)
ながす	97%(30/31)	100%(17/17)	かはす	0%(00/01)	0%(00/01)
あそばす	88%(07/08)	100%(07/07)	かよはす	0%(00/02)	0%(00/02)
さす	70%(21/30)	50%(06/12)	きこしめす	0%(00/06)	0%(00/04)
もてなす	67%(04/06)	0%(00/03)	くらす	0%(00/02)	0%(00/01)
かへす	57%(04/07)	71%(05/07)	ついやす	0%(00/01)	0%(00/01)
ゆるす	50%(01/02)	100%(02/02)	つかはす	0%(00/17)	0%(00/11)
わたす	43%(10/23)	93%(14/15)	てらす	0%(00/01)	0%(00/01)
つくす	40%(04/10)	80%(04/05)	にごす	0%(00/01)	0%(00/01)
おとす	36%(04/11)	67%(04/06)	のこす	0%(00/02)	0%(00/02)
いだす	33%(25/75)	65%(31/48)	ほろぼす	0%(00/09)	0%(00/06)
ならす	33%(02/06)	40%(02/05)	まします	0%(00/04)	0%(00/02)
おこす	33%(05/15)	33%(04/12)	まはす	0%(00/02)	0%(00/01)
だす	33%(01/03)	—	むす	0%(00/05)	0%(00/05)

くださ	25%(01/04)	50%(02/04)	めぐらす	0%(00/06)	0%(00/03)
ふす	15%(02/13)	0%(00/04)	めす	0%(00/69)	0%(00/30)
なす	9%(02/23)	0%(00/18)	もよほす	0%(00/01)	0%(00/01)
おはす	8%(02/24)	0%(00/15)	やつす	0%(00/01)	0%(00/01)
すます	8%(01/12)	0%(00/15)	あかす	0%(00/01)	—
いからかす	0%(00/02)	100%(02/02)	おす	0%(00/02)	—
おろす	0%(00/02)	100%(02/02)	ころす	0%(00/04)	—
かざす	0%(00/01)	100%(01/01)	とばす	0%(00/01)	—
なほす	0%(00/02)	100%(01/01)	なやす	0%(00/01)	—
ちらす	0%(00/03)	33%(01/03)	ひたす	0%(00/01)	—
あらす	0%(00/03)	0%(00/03)	ひるがへす	0%(00/03)	—
あらはす	0%(00/02)	0%(00/01)	もらす	0%(00/02)	—
いたす	0%(00/07)	0%(00/06)	まうす	—	0%(00/02)
うつす	0%(00/01)	0%(00/01)	合計	29%(149/521)	39%(122/314)

注

- (1) 橋本四郎氏「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」(『国語国文』31-4、昭37) / 金田一春彦氏『四座講式の研究』(三省堂、昭39) / 奥村三雄氏「サ行イ音便の消長」(『国語国文』37-1、昭43) / 北原保雄氏『きのふはけふの物語研究及び総索引』(笠間書院、昭48) / 福島直恭氏「サ行活用動詞の音便」(『国語国文論集』21、平4) / 柳田征司氏『室町時代語を通して見た日本語音韻史』(武蔵野書院、平5) / 秋山英司氏「サ行四段活用動詞のイ音便はなぜ衰退、消滅したのか」(『愛媛国文と教育』32、平11) 等
- (2) 坂梨隆三氏『江戸時代の国語 上方語』(東京堂出版、昭62)
- (3) 出雲朝子氏「再びラ行四段活用動詞の音便形について」(『青山学院女子短期大学紀要』34、昭55)
- (4) 注2に同じ。
- (5) 奥村三雄氏『平曲譜本の研究』(桜楓社、昭56)
- (6) 金田一氏論文(ここでの引用文は『金田一春彦著作集第5巻』玉川大学出版部、平17による)には「(二拍二類動詞に)『て』が低く付いている例(略)は、すべてサ行四段活用動詞であることが注意される。(略)中世、四段活用動詞に『て』のついた形は、原則として音便形をとったが、サ行のものだけには徹底的には起らなかったようで、恐らくこのこととも関係があろう。(略)前の動詞と後の動詞との意味の連関が密接(略)な場合にかぎり、サ行四段活用動詞(略)につく『て』が、高くついたものと想定する」とあり、橋本氏論文とあわせ、「て」が高く付く時に音便形が現れることが予想される。

(おくむら かずこ・本学専任講師)